

教育課題部会

研究主題 「キャリア教育の視点に立った教育活動の推進」

研究の概要

フリーターやニートと呼ばれる若者の増加が大きな社会問題となっている現在、勤労観・職業観を育成し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てるキャリア教育の充実が求められている。生徒の勤労観・職業観は、それぞれの発達段階における様々な体験の中で育成されるものであり、学校におけるすべての教育活動において、キャリア教育の視点に立った実践が必要である。教育課題部会では、キャリア教育の全体計画例を基に、教科科目指導、「総合的な学習の時間」、特別活動等におけるキャリア教育の視点を示し、効果的な指導方法について開発研究を行うこととした。

I 研究の目的

キャリア教育とは、平成11年12月中央教育審議会答申で、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と示されている。また平成16年1月に文部科学省から示された「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」では「キャリア」を「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」とし、「キャリア教育」を「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と定義している。

このようにキャリア教育が求められてきた背景には、若者のフリーター志向やニートの増加、就職後の早期離職の増加等、今日の大きな社会問題がある。「学校から職業への移行」にかかる課題の深刻さを踏まえ、発達段階に応じたキャリア教育が提唱され、キャリア教育の視点から教育を再構築し、系統的な取組を進めていくことが重要となってきた。各学校において各領域の関連する諸活動を体系化し、計画的、組織的に実施できるよう教育課程の在り方を見直すことが必要である。

本部会では、平成18年度から実施される「キャリア教育の全体計画表」例を作成し、「教科」「特別活動」「総合的な学習の時間」等の教育活動、とりわけ教科科目において、キャリア教育の視点をどのように導入し、展開すべきか、また健康教育についてキャリア教育として重要な役割を担っているものと位置付け研究を進めた。

II 研究の方法

「キャリア教育の全体計画」を全日制課程普通科をモデルとして作成し、「キャリア教育の目標」「進路指導の重点」「キャリア教育を推進する組織」等を示した。「教科」「特別活動」「総合的な学習の時間」においては、職業的（進路）発達の段階における領域では、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4つに区分し、それぞれのかかわりを研究した。特に教科指導においては、4つの能力育成を重視した授業展開例を具体的に検討した。また、「総合的な学習の時間」におけるキャリア教育、学校設定教科である「産業社会と人間」及び商業科の「ビジネス基礎」を参考例として取り上げた。さらに「生きる力」の基盤としての健康教育にも言及した。

Ⅲ 研究の内容

1 キャリア教育の全体計画例

都立高等学校<全日制課程>キャリア教育の全体計画

学校の教育目標 (1) 主体的な学習や自律的な学校生活が過ごせるよう教育の質の向上を図る。

- (2) 一人一人が希望する進路を実現できるよう進路指導の充実を図る。
- (3) 健康教育を計画的に推進し、健康・安全・環境整備に対する意識を高める。
- (4) 地域との連携・交流を図り、地域社会に貢献できる学校づくりを推進する。
- (5) 自律経営推進予算を活用し、本校の特色ある教育活動の充実と教育環境の整備を図る。
- (6) 学校PRに努め、学校方針を理解しうる意欲旺盛な生徒の獲得を目指す。

育てたい生徒像

自らの将来設計をなし、自他を尊重できる豊かな人間性に富んだ生徒を育成する。

キャリア教育の目標

- ① 生徒自らの個性や適性の把握及び生徒一人一人のキャリアの発達と自立。
- ② 生涯にわたる教育・起業家教育。
- ③ ハローワーク等との連携・高大連携・中高連携・企業連携等による進路情報の充実。
- ④ 基礎学力の定着と情報活用能力等の育成。

進路指導の重点	教科	特別活動	総合的な学習
1 学年： ・自己理解の深化と自己受容 職業指導、 (職業インタビュー) 自己理解 (コース選択) 基礎学力指導	人間関係力形成 ・国語・英語・中国語等でのスピーチ・討論・ディベート等 (コミュニケーション能力) ・体育でのチームプレイ ・実験等グループ学習 ・各授業でのプレゼンテーション能力 ・授業におけるマナー教育	・球技大会 ・文化祭 ・体育大会 ・生徒会・部活動 ・マナー指導 ・HR指導 ・英語スピーチ大会 ・演劇鑑賞教室	・指導力と協調性 ・自己評価 ・相互評価 ・規範意識 ・社会性
2 学年： ・選択基準の職業観勤労観の確立 ・将来設計の立案と社会移行の準備 就業・進学指導 (会社見学・インターンシップ・キャンパス見学等) 進路情報の収集と検討 一般教養	情報力活用 ・情報リテラシー ・文書処理・情報処理 ・図書館指導 ・ノート作成指導	・学校行事(遠足や修学旅行等)の資料作成	・資料収集とその手法 ・知識の活用
3 学年： 具体的な進路先の決定のための指導 進路先への定着指導	将来力設計 ・家庭科・保健等のライフプラン設定 ・公民科等での社会の仕組みを学んだ上での将来設計 ・各教科での課題設定	・委員会・部活等の計画作成 ・進路ガイダンス ・オープンキャンパス・企業見学	・課題設定等の検討
生活指導の重点 ・授業規律の確保 ・社会規範の確立 (マナーの徹底) ・人間性の育成	意図力決定 ・各教科における班別学習 ・各教科における判断 ・PDCAサイクルを取り入れた授業	・委員会・部活動のリーダー育成 ・インターンシップ	・課題研究の方法・方針の決定
	その他の能力 ・各教科における人間性の育成 ・各教科での論理的思考力の育成(特に理数系) ・資格取得(簿記検定・英語検定等)	・セーフティ教室 ・薬物乱用防止教室 ・保健だより ・ボランティア講演会	・一般常識 ・基礎学力

キャリア教育を推進する組織の名称：キャリア教育推進委員会

保護者・地域との協力・連携	分掌との連携	都や国の事業や小・中・大等の連携
・学校運営連絡協議会 ・本校PTA・同窓会 ・近隣企業・商店街等	・教務・進路指導部 ・生活指導・保健部 ・各教科	・大学 ・キャリア教育連携研究会 ・近隣小中学校・保育園

	各教科	特別活動	総合的な学習の時間
<p>1 学年</p> <p>○自己理解の深化と自己受容</p> <p>○選択基準としての職業観・勤労観の確立</p>	<p>・自然体験や社会全体、観察・実験・実習、調査・研究、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。</p>	<p>【学級(ホームルーム)活動】</p> <p>・学級や学校における生活上の諸問題の解決、学級内の組織づくりや仕事の分担処理などの活動</p> <p>・個人及び社会の一員としての(在り方)生き方に関すること</p> <p>青年期の不安や悩み(悩みや課題)とその解決、自己及び他者の個性の理解と尊重、社会の一員としての自覚と責任(社会生活における役割の自覚と自己責任)、男女相互の理解と協力</p> <p>【生徒会活動】</p> <p>・学校生活の充実・改善向上を図る活動やボランティア活動</p>	<p>・学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的創造に取り組む態度を育て、自己の(在り方)生き方を考えること</p>
<p>2 学年</p> <p>○将来設計の立案と社会移行の準備</p>	<p>・集団生活への適応と選択教科(教科・科目)や進路の選択にかかるガイダンスの機能の充実</p>	<p>【学級(ホームルーム)活動】</p> <p>・学業生活の充実及び将来の生き方と進路の適切な選択(決定)に関すること</p> <p>・学ぶことの意義の理解、自主的(主体的)な学習態度の形成(確立)、選択教科等(教科・科目)の適切な選択、進路適性の吟味(理解)と進路情報の活用、望ましい職業観・勤労観の形成(確立)、主体的な進路の選択(決定)と将来設計など</p> <p>【学校行事】</p> <p>・勤労生産・奉仕的行事における職業や進路にかかわる啓発的な(職業観の形成や進路の選択決定に資する)体験やボランティア活動など</p>	<p>・自己の在り方生き方や進路について考察する学習</p> <p>・ボランティア活動などの社会体験、見学や調査発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習</p>
<p>3 学年</p> <p>○進路の現実吟味と試行的参加</p>	<p>・高等学校普通科、専門学科におけるコースや類型及び選択科目の設置、総合学科における系列の提示と多様な選択科目の設置など</p>	<p>【学級(ホームルーム)活動】</p> <p>・望ましい人間関係の確立(コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立)、ボランティア活動の意義の理解、(国際理解と国際交流)など</p>	<p>・生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題について知識や技能の深化、総合化を図る学習</p>

2 教科指導におけるキャリア教育

(1) 各教科におけるキャリア教育

現在、多くの学校が、社会人講話、インターンシップなどの社会体験を中心に、積極的にキャリア教育に取り組んでいる。しかし、どのようにキャリア教育に取り組むかを具体的に打ち出すことができずに苦慮している学校も少なくない。

また、生徒は、社会生活や将来の職業生活における必要性を“授業の中”で認識することが十分にできないといった状況が見られ、「何のために学ぶのか」という目的意識が不明確なままになり、学習意欲の低下に結びついている現状がある。これは、PISA2003の調査結果でも示されている。

キャリア教育は、学校の教育活動の中心である日常の授業で視点を変えることで、その目標を実現することが可能な部分が多い。発想の転換や授業方法・教材の工夫などの「授業改善」が、キャリア教育の推進に資する。

そして、その改善には、「なぜ勉強しなくてはいけないのか」「今の学習が将来どのように役立つのか」といった発見や自覚をもたせ、学習意欲と学力の向上を図るためにも、授業に「キャリア教育」の観点を加えていく必要がある。教科の学習を、職業的発達にかかわる4つの能力「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」を踏まえて、学校と社会との接続を意識した授業を組み立てることで、生徒の学習意欲を喚起し、確かな学力の育成を図ることができる。

また、「教科」と「特別活動」「総合的な学習の時間」で系統的・計画的にキャリア教育を行う中で、“在り方生き方”を考えさせ、望ましい勤労観・職業観をはぐくませていくことが大切である。

以下、教科指導におけるキャリア教育の具体的な観点、方策について述べる。

ア 「人間関係形成能力」を重視した授業

社会において、相手の考えを理解し、自分の意思を的確に伝え表現するコミュニケーション能力は、スムーズな人間関係を築く上で欠くことができない能力である。しかし、子どもたちには、核家族化・生活環境などの変化によって、コミュニケーション能力の低下が問題となっている。

このことについて、教師が意図的に集団内での人間関係を意識させ、発問の仕方を工夫するなどの授業改善を行うことにより、コミュニケーション能力の育成が図れると考えた。

【◎は具体的な授業例を示す。また、日常的な授業の中で意識して指導したい項目を示す。】

◎自己表現を重視した授業

自分の意思や考えを積極的に表現し、他者の意見を的確に理解する授業。

- ① 授業の初めに「最近のニュースで感じたこと」などの3分間スピーチを行う。
- ② 課題を考えさせた後、なぜそのように考えたかを班やクラスで討論させる。
- ③ 環境問題などについて、賛成・反対の意見に分かれディベートを行う。意見を出しやすくするために最初は小グループから初め、その意見をクラスレベルまで引き上げる。

◎他者を理解し、尊重する授業

他者と場に応じた適切なコミュニケーションを図り、チームワークを高める授業

- ① 理科の実験や社会のグループ調べ学習などの中で互いに役割分担を行い、活動方針や方法を一致させて行動する。
- ② 他者の気持ちを理解する授業で、ロールプレイングなどの手法を取り入れる。

☆日々行っている下記のような授業は、コミュニケーション能力の育成の基本になっていると考える。

- ・生徒への発問、指名を積極的に行い、生徒による発言を促す。
 - ・机間指導等での声がけをして、個別のコミュニケーションを図る。
 - ・生徒相互で意見を交換させる(隣の人と相談してごらんなど)。
 - ・ノートを集め、ノートへ教師からのコメントを記入する。
 - ・ノート提出の際「～について、必ず3行以上の意見を書くこと」などと指示する。
- 小テストなどは点数だけでなく、教師から一言を付け加えて返却する。

イ 「情報活用能力」を重視した授業

様々な情報を収集・探索し、必要な情報を選択・活用していく「情報活用能力」は、自己の進路や生き方を考える上で重要な能力である。しかし、多くの情報が氾濫する中、生徒たちには適切な情報を得る事ができず、さらに情報に振り回されるなどの状況が見受けられる。

変化の激しい情報社会において、主体的に適切な情報を読み取る能力、さらに自ら情報を発信して自己PRできる能力を高める授業の工夫・改善を行うことが望まれる。

◎メディア・リテラシー

新聞、テレビ、インターネットなどの、各メディアの特性の違いを理解し、主体的に適切な情報読み取り能力を身に付ける。また、インターネットなどを利用し、不特定多数の人への、“情報発信能力”を高める授業。

- ① 一つの事件を2つの新聞で類似点・相違点や論調を比較し、立場による違いや自分の考え方をまとめて、発表させる。『国語』『公民』
- ② いくつかのCMを選び、テーマ、演出・BGMの効果などを調べさせる。文化祭などの行事と結びつけて、各団体のポスターや映像などを作成する。『情報』『芸術』

◎教科『情報』をクロスカリキュラムとして実施

『情報』は、パソコン等を利用して情報活用能力を高め、他教科との連携を行える教科である。

- ① 課題設定には、“エネルギー問題”などの現実的な問題を取り上げ、他教科『理科』『公民』『国語』との共通課題とすることで、生徒の意識を高め授業時間を有効に活用する。
- ② 生徒自身の進路先、修学旅行先について調べまとめさせるなど、身近な課題を取り上げることも有意義である。

一方、生徒には、様々な体験を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連を理解していく「職業理解能力」が求められる。しかし、生徒はインターネット等を利用し多くの職業情報が手に入るにもかかわらず、社会との接点や体験に乏しく、限られた職業を選択しがちである。

社会を知り、世界を広げ、職業の選択肢を増すための「職業理解」に、世代間の交流、いろいろな職業人との接点を増やした授業を行うことが重要である。

◎職業・勤労に対する理解・認識を深める授業

保護者・同窓会・企業人・NPOなどの外部講師を活用して、社会の仕組み(経済・お金の話など)、世の中の現状を理解し、体験させる授業。『公民』『商業』(P7参照)

☆生徒が板書を見たり、教科書・資料を見たり、教師の話を書く事も情報の活用である。より正しく、効率よくそれらの情報を活用し、学習理解を深めることができるように配慮する。

- ・教科書、資料を生徒自身でよく見て読み、「1行でまとめなさい」などのように指示する。
- ・ビデオやPCを使う場合は漫然と見せるのではなく、ポイントをはっきりさせておく。

ウ 「将来設計能力」を重視した授業

仕事上の自己の役割と意義を把握し、果たすべき役割を計画的に段取りよく遂行する「将来設計能力」は、社会人として重要な能力である。しかし、進路への目的意識が明確でないために、積極的・計画的に学習に取り組む姿勢の低い生徒が多いことを指摘されている。

授業では、生徒が学習に計画的かつ主体的に取り組めるように授業計画を提示し、集団での学習活動の中で、「役割把握・認識能力」の育成を図るように組み立てる。

◎グループ別の実験・班別の調べ学習

グループ別学習を積極的に取り入れる中で各自の役割分担を行い、計画を立て、段取りを考え、各役割を遂行するなど、実際の仕事の流れを想定した学習を行う。

☆生徒の主体的な学習の指針として、“シラバス”、“週案”などの授業計画を活用する。

- ・月ごと、単元ごとの授業計画を常に生徒に示し、スモールステップで学習への目標を設定する。
- ・試験では、「学習のねらい」「評価の観点」について生徒に提示をして、計画的な学習を指導する。
- ・宿題や課題を利用して、自立的な学習を促す。

エ 「意思決定能力」を重視した授業

社会では、自らの意思と責任においてより良い選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取組み克服する「意思決定能力」を身につけることが大切である。しかし、子供達の精神的・社会的自立が遅れ、職業の選択や・決定を先送りにするモラトリアム傾向が高まっている。また、環境・人間関係に左右されやすいことも指摘されている。

授業の中で「意思決定能力」をつけるためには、環境問題のように立場により答が異なるテーマを考え、課題を検証する前に仮説を立て討論し自分の意見を決定する授業や、課題解決学習などを通常の学習の中に取り入れ、一人一人が自己有用感を高める授業の工夫をする必要がある。

◎仮説・検証を伴う授業

生徒の問題意識を高めるよう設定を工夫した課題を出す。生徒が予想・考え（仮説）をノートに書き、班ごとに意見交換や討論をする。さらに、全体の意見を確認して、課題の検証を行う。

この授業方法は多くの教科で実施可能である。

- ①『地理歴史』『公民』で、条件を示して、どの地域の人口が増加するかなどの社会現象を、各人で仮説を立てて予想させて、結果を統計（グラフ）資料で検証させる。
- ②『家庭』で、家計のやりくりをいくつかの条件を変化させる中で仮説を持って考えさせ、収入と支出を計算させて検証させる。テーマにより『理科』『公民』『数学』『保健』『家庭』は互いにクロスカリキュラムとして展開が可能である。

◎課題解決学習

課題解決授業は、自ら問題に感じたことを課題に設定し、解決可能な策から仮説を設けて、結論を推論し最後に検証する学習である。授業時間などの制約はあるが、長期休業なども利用して積極的に実践していきたい。

☆ 失敗やリスクを恐れずに自分の考えを決定し、発言できる授業雰囲気を作りたい。

☆ 授業の際に全員に対して一斉の指示を与えるだけでなく、意図的に選択の機会を与えることによって、生徒自身の意思決定を促す場面を設けたい。

・挙手をさせる ・選択問題を与える ・練習問題を与える場合でも、何種類かを提示して選択をさせるだけであっても、状況を把握して決断する必要がある。（「この10問のうち5問を解いて提出しなさい。」）

(2) 「総合的な学習の時間」におけるキャリア教育

さまざまな学校で「総合的な学習の時間」の内容として、キャリア教育的な取組が行われているが、その効果を高めるために、評価の観点を明確にして年間を通した計画を立てるとよい。カリキュラムを作成する際に、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」など、どのような点を伸ばすことを意識するかを明確にすることが望ましい。

以下に示すのは都立大島南高等学校で行っている「総合的な学習の時間」である。年間を通して、キャリア能力の向上を目指して成果を上げている。明確な目標と評価の観点を設けて指導を行うことによって、学習の成果をあげることが期待される。

【都立大島南高等学校の「総合的な学習の時間」における目標と評価の観点】(抜粋)

- ア 自己を理解し、社会を知り、さまざまな課題を解決していくことにより、主体的にライフプランを作成する能力や態度を育成する。
- イ 諸地域の自然・文化・産業・職業を研究することにより、幅広い学び方や調べ方を身につかせ、自ら進んで物事に取り組む態度を育成する。
- ウ 他者を理解し、仲間と協力することを通して、広い視野に立って創造的に物事を考えることのできる能力や態度を育成する。

ア 積極性(自分から進んで前向きに果敢に行動することができる。)

- A 自分の実力を拡大するために、必要な知識・技能の拡大等努力を継続している。
- B 自分の作業遂行に専念しており、その際の不足している知識・技能を認識している。
- C 自分の作業遂行に専念している。

イ コミュニケーション力(相手の意思をきちんと理解し、それに対する自分の意思を明確にもつことができる。)

- A 相手のレベルに合わせた意思疎通の方法を工夫し、信頼関係を確保している。
- B 発話、文書連絡、マナー等のコミュニケーション上の基本要件を適宜適切に実践している。
- C 相手に最低限のアイデアや意見を伝えることができる。

ウ チームワーク(他のメンバーを評価し、チームの円滑な運営を促進するように行動できる。)

- A チームの円滑な運営を促進できるよう、周囲に働きかけをしている。
- B チームの目標を理解し自分に課せられた作業を遂行することができる。
- C 集団の中における自分の位置を確認することができる。

エ 課題解決力(課題を発見し、その解決のための方策を図ることができる。)

- A 収集した情報を活用(分析・判断・選択・整理・加工・蓄積)し課題を解決することができる。
- B 課題解決に向けた情報を多面的に収集することができる。
- C 自分における課題を発見することができる。

オ プレゼンテーション力(相手に自分の考えを適切に表現し、アピールすることができる。)

- A 校内発表会、文化祭、ホームページ等で発表し、自分の考えを的確に表現することができる。
- B プレゼンテーションソフト等を活用し、相手にわかりやすく伝達するための工夫をすることができる。
- C レポート作成、表現方法の工夫を通して、相手に自分の考えを伝えようとする努力をしている。

【資料】平成 14・15 年度 東京都教育委員会「多様な指導形態導入推進校」指定校
—総合的な学習の時間の指導の充実に関する研究資料集—

(3) 選択科目・学校設定教科等でのキャリア教育

ア 選択科目としての商業科目「ビジネス基礎」などの設置

普通科高校でも、学校の状況を踏まえた上で、キャリア教育の観点に立った多様な選択科目を設置することによって、生徒の様々な能力の向上が期待できる。

その一例として商業科目「ビジネス基礎」を挙げる。「ビジネス基礎」は社会の変化に迅速に適応できる科目であり、自らの力で学び、判断し、たくましく生きる力を育成するキャリア教育を推進する科目としては優れている。職業観を育成するために学習内容を工夫して、販売実習、模擬ビジネスゲームなど体験的な授業を展開したり、民間企業等の外部講師を活用したりすることによって、職業理解能力の育成を図ることができる。また、外国人講師の活用をすることによっても、単元「外国人とのコミュニケーション」で人間関係形成能力の育成が期待できる。

イ 学校設定教科としての「産業社会と人間」の設置

総合学科高校は職業観の育成と、生徒の興味関心に応じた多数の選択科目を特色としている。

「産業社会と人間」は総合学科高校での原則必履修科目であり、さまざまな科目の中から自分の進路を見据えて科目選択をするために1年次での履修が義務付けられている。普通科高校においてもこの教科を学校設定教科として設置することによって、年間を通じた計画的なキャリア教育を推進することができる。検定教科書がないために導入に当たっては工夫が必要だが、過去のホームルームや総合的な学習の時間で扱われてきた内容や、従来の進路指導などを体系化して教材化することも可能である。また、カリキュラムや実施の方法等は総合学科高校での実践から学ぶことも多い。年間を通じた授業でキャリア教育を実施することによって、生徒の様々な能力の向上とともに、生徒の将来への目的意識の高まりや学習意欲の高揚なども期待できる。(学習指導要領第1章総則 第2款 各教科・科目及び単位数等5(2))

【都立晴海総合高等学校での平成16年度「産業社会と人間」単元の抜粋】

- ・オリエンテーション ネームゲーム
- ・フレッシュマンキャンプ (含自己理解のための性格診断テスト)
- ・職業レディネステスト (実施・解説・結果の自己分析)
- ・職業についてのワークシート
- ・班別テーマ学習 (プレーストーミング・発表)
- ・自分史ワークシート (ライフプランの基礎作り)
- ・系列への招待 (系列概要説明・全体・系列別)
- ・ディベート (準備・試合)
- ・科目選択指導 (各教科からの留意点)
- ・職業に関する講演会
- ・職場訪問 (事前指導・訪問・事後指導)
- ・ライフプランワークシート
- ・ライフプラン発表会 (クラス・全体発表)
- ・メンタルヘルス (講演会)

前期 班別調査学習のテーマ候補 共通テーマ「産業社会と経済活動の変化」

後期 ディベートのテーマ候補 共通テーマ「現代社会における少子高齢化」

3 特別活動におけるキャリア教育

特別活動は授業と並んで教育課程の中心をなし、学校の特色をよくあらわすものである。また、特別活動は生徒の自主的・自立的な行動による部分が多く、キャリア教育の4つの能力を育成するために大いに活用できる。特に、文化祭、体育祭、修学旅行という生徒にとっても大きな意味を持つ行事は指導の工夫によって、より大きな効果を期待できるものである。その他にも、柔軟で積極的な発想で指導を工夫すると期待以上の効果が現れることがある。このように、行事やホームルーム活動は、ねらいを明確にして、それに沿った指導を意図的に行うことで生徒の諸能力の育成に大きく貢献する。

そこで、以下に文化祭を取り上げて行事の企画、運営に際して具体的な指導の工夫の例を示す。

ア 文化祭での指導例

i) 企画段階での指導

企画調整会議で、文化祭を活用してどのような能力を育成するかなどのねらいを明確にして、生活指導部や生徒会指導部で具体的な方法を検討する。そのねらいと指導方法をもとに、生徒会や文化祭実行委員会の指導担当教員が、生徒に文化祭のねらいを指導する。直接生徒と話し合う方がよい場合と、自主性に任せながら軌道修正する方がよい場合など、学校によって判断すると良い。注意することは、放任せず学校としての指導が適切に行われるように進行管理をすることである。

ii) 準備から実施段階での指導

文化祭は総合的な能力の育成について様々な方策を立てることができる。ともすれば人間関係形成能力にのみ意識が向きがちであるが、ここでは他の能力の育成について考えてみる。

この段階では状況の急変などに対応することに力を集中して、本来の指導がおろそかになることがある。この状態を回避することと、キャリア教育の視点を組み合わせてみると効果的な指導ができる。例えば、各係のチーフとサブチーフの生徒に対して起こりうる問題の例を指導しておき、そのレベルの範囲内であれば、速やかに教師に報告をすることを確認した上で、生徒にある程度任せてみる。状況の変化と対応について指導しておくことで、生徒相互の相談で乗り切ることができ、意思決定能力の育成や、事前の危機回避策を考えさせることで、将来設計能力を育成することもできる。

このように、発想を柔軟にすることで個々の生徒にあった指導を展開でき、それぞれのねらいに応じた効果を期待することができる。当然、失敗もあるがトライアンドエラーは大きな問題ではなく、教師、生徒ともに成長する過程としてとらえるべきである。

iii) 実施後の指導

終了後は開放的な気持ちになって、事後の検討がおろそかになりがちである。事後の検討については企画、準備、実施について積極的に意見を出させて、検討を行う必要がある。これは、次年度につなぐ目的だけでなく、生徒が自らの役割やその他の行動を振り返ること、あるいは他者の行動を検証することを通して生徒の諸能力の育成を図ることができるからである。

イ まとめ

行事、ホームルーム活動ともに、企画・運営には大きな労力や時間を費やすが、そのもたらす効果は大きい。各校で実情に応じてねらいを設定して適切な指導を行うことが重要である。

4 学校保健計画を基にしたキャリア教育

生徒が社会にでて生きるためには、「生きる力」が不可欠である。この「生きる力」を育成する上で、基本的な生活習慣の確立や規範意識の育成など生徒の健全育成が大きな課題となっている。そのためキャリア教育の基盤となる「生きる力」を育成するためには、学校全体で健康教育の充実に取り組まなければならない。

これまでは、学校では科目「保健」や養護教諭が主として健康教育を行っていた。しかし、平成17年度に都立学校においては、学校保健計画を作成することになり、各分掌、各学年、関連教科と連携して計画を立てた。これは学校保健を組織で推進するための基本となるものである。学校保健計画をみると、これからの健康教育は、学校全体で取り組む必要があることがわかる。学校保健計画を基にした健康教育の取組について述べる。

(1) 学校行事

生活指導部・保健部・学年・関係機関との連携による薬物乱用防止教室や交通安全教室及び地域・保護者・関係機関の連携によるセーフティ教室の実施等があげられる。薬物乱用防止教室や交通安全教室は、規範意識や自己管理能力の育成が期待できる。また、文化祭で、クラスや生徒保健委員会の展示に健康に関連するテーマを取り上げることで、クラスや委員会活動を通じた健康教育もできる。

(2) 保健教育

教科指導では、科目「保健」、教科「家庭」それぞれの指導だけでなく、テーマによっては、「保健」「家庭」や公民科の「現代社会」とのクロスカリキュラムも可能である。また、必要に応じて養護教諭や栄養職員との連携が可能である。特に、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付けられている食育は、あらゆる教育場面や機会において指導されなければならない。また、学校の役割としては、魅力ある食育を推進して子どもの健全な食生活の実現と健全な心身の成長を図ることが期待されている。

保健指導では、保健日よりだけでなく学年日よりやPTA広報誌等を活用することもできる。

(3) 組織活動

生徒保健委員会や学校保健委員会の活動である。学校保健委員会では、校医やPTAも出席するので委員会を活性化することで、保護者との意見交換もでき、生徒の健全育成についての連携が期待できる。

(4) まとめ

生徒の健全育成は、遅刻指導やあいさつ・マナー指導も含めて、日常の教育活動全体で積極的に取り組むことが大切である。生活指導部の遅刻指導やあいさつのようなマナー、また授業規律を学ばせることも必要である。

学校における健康教育は、単に、健康に過ごすためだけの知識の習得ではない。実践力・規範意識・自己管理能力・思いやりの心の育成・基本的な生活習慣の確立等の生徒の健全育成である。それは生徒に、キャリア教育の基盤である「生きる力」を身に付けさせる教育でもある。そのため、教科指導だけでなく、日常の教育活動を含めて学校全体で行っていかなければならない。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

物質的な豊かさの拡大や、社会における個人の責任が希薄になっていることなど、若者を取り巻く環境は決して良いとはいえない。その中で、引きこもりやニートといった社会に不適應を起している青少年が増加している。このことについて社会の各部門での取組が行われ、教育の分野では小・中・高・大でのキャリア教育の連携が求められた。このことに対して、当部会では、行事の新設など教員の負担を新たに求めていくものでなく、発想の転換や、授業方法、教材の工夫をもって、授業改善を行うことが、キャリア教育の推進に資すると考えた。

キャリア教育の視点を導入した授業改善を考えるに当たって、委員構成が各教科からまんべんなく出ているわけではないのが幸いした。ともすれば、各教科科目の工夫事例を集めるにとどまってしまうが、ここでは、思い切ってキャリア教育における4つの能力の育成に重点をおいた、汎用的な授業の工夫を考えることができた。

次に普通科目でなく総合学科原則必履修科目の「産業社会と人間」及び商業科目「ビジネス基礎」を取り上げ、普通科などへの導入の効果について研究した。「産業社会と人間」は各学校でカリキュラム開発を行う必要があるが、学校の状況に応じた柔軟な指導ができる利点は大きい。「ビジネス基礎」は商業科目で、普通科などでもすぐに選択科目として設置が可能である。また、「総合的な学習の時間」については、現在でもキャリア教育の一環として行われている学校が多いことから、更なる活用について研究した。

特別活動はその特性から、生徒が積極的に参加することでキャリア教育の効果を大きく出せるものであることで例示しながらねらいや留意点を示した。

また、キャリア教育の目的にある、社会に適應して生きていく力を育成するために基礎的な部分を確立するためには、基本的な生活習慣の確立や規範意識の育成など生徒の健全育成が欠かせない。そこで、その一環として健康教育の在り方の研究を取り入れた。

このように、教科教育と特別活動を相互に連携させて、教育課程全体でキャリア教育の視点を導入した教育活動を展開することで、生徒が社会にスムーズに適應でき、たくましく生き抜いていく力を身に付けることができる。各学校においては、この後示す課題を検討し、積極的に教育課程にキャリア教育の視点を導入する必要がある。

2 今後の課題

各学校でのキャリア教育を充実させるために検討しなければならない課題は、以下の点である。

- (1) 各学校の状況に応じて、各教科でどのようにキャリア教育の視点を導入していけばよいかを研究する。
- (2) 授業改善を行う上で、キャリア教育の視点をあえて入れることで効果を上げるよう工夫する。
- (3) 特別活動の見直しを行う際、キャリア教育の視点で再確認を行い、実施企画書の目的やねらいの中にキャリア教育の視点を入れる。
- (4) 年間授業計画や週ごとの指導計画にキャリア教育の視点をねらいとして記入するよう工夫する。
- (5) 授業規律の確保など生活指導面でも社会に適應する能力を育成するよう工夫して、すべての教育活動でキャリア教育を推進する。

これらの課題に対して、各学校の生徒の実態、目指す生徒像等に基づき具体的な方策を示し、実践の中から改善を進めることが大切である。